

# 「祈り」について

私たちは、原初的な祈りについて無関心でありすぎた。

足摺縄文文化研究会  
理事 平石知良

そんなに遠く無い昔、夜明け前の路地には声明と香華が流れていた。暑さの厳しい時期には、早朝の薄明かりの下で既に作業は始まっていて日の出とともに太陽に誰もがわだかまり無く手を合わせているのだった。モスリムもクリスチャンもユダヤ教徒も仏教徒も、あらゆる人々がそれぞれの帰依する宗教の戒律に従って祈っている。祈って来たし、祈り続けるだろう。例えば、モスリムに帰依する国家であれば声明は同じリズムで同じ言葉で町を満たすだろう。キリスト教徒の声明・賛美歌がゴスペルに変化したとしても、神を讃える言葉は同じだろう。道教もヒンツ―教も民族や国家の管理の下に、いや宗教による同一性が国家を形成している、従って異なつた宗教が隣り合っているのは、国家間や地域間である。その為に隣りする異教徒との間に諍いが生じれば、帰依する神とともに戦うあるいは神の為に戦う、戦争が生まれる。

私の聞いていた声明は、統一されていないバラバラの声明だった。異なつた宗教や宗派が家単位で隣り合っていた。そして、宗教が隣人との

諍いの重要なポイントとなる事ことは少なかったように記憶している。あんなに溢れていた声明が、聞こえなくなった。私も日常の中で「祈る」ことが少なくなっている。「私は、無神論者です。」という人が増えていくように感じている。

宗教の是非は、神学や哲学の世界に譲るとして、歴史に何かを求めていく方々が、古代人たちも現代の私たちと同じ「無神論者」であると決めてかかるのは、事実誤認を招く結果になりはしないだろうか。私たちは、宗教やもつと原初的な祈りについて無関心でありすぎた。過去は「畏れ敬う」という、現代では忘れかけている言語が徳目の一つとして厳然と存在していて、「祈り」に満ち溢れていた。

## 水への祈り

縄文文明に魅せられて各地の遺跡を巡って気づいたのだが、どの遺跡からも水の香りや水の音があつた。流れる水・湧き出でる水・落下する水・青々と鎮まれる水。必ず遺跡は水辺にあつた。縄文以降の神社仏閣も、必ず水の清冽な香りで満た

されていた。青々と鎮まれる水には、伝説が伴っていた。竜神伝説や大蛇伝説である。伝説の主人公は蛇をモチーフにしていた。蛇は脱皮を繰り返して成長を続ける。蛇が最大の大きさを得るのは、死のときである。秋、寒さの始まりには大地深くに眠り、春、花の開花とともに地上に蘇る。そして、大地がしつとりと水で潤った場所を生活の場所としている。この蛇のライフサイクルは、人類の憧れに近かつたのだろう。何時までも何時までも成長を続ける、大地から蘇るのは死からの蘇りを思わせるのだろうか、大切な水場にはいつも先回りをして、中でも毒蛇は小さな体で大きな相手をやつつける、憧れても不思議ではない。

文明の消長も、水とともにあつた。砂漠に生まれた文明は、オアシスのような湧き出でる水の文明である。大地深くにトンネルを掘って、遠くまで水を運ぶ方法を開発して街は大きく発達して行つたし、水が途絶えれば街は廃虚と化していったのがその歴史である。あの過酷な砂漠という大自然で生きて行くには、当然水の所有を決めるには巨大な力を必要としたのだつた。水の配分に与れな

ければ、死ぬしかない過酷さに暮らしていたのだから、戒律の厳しい破戒には厳罰をもつてのぞむ宗教が生まれてきたのだろう。砂漠の民の憧れの場所は、緑が生い茂り水が滾々と湧き続ける場所である。

その水の滾々と湧きすぎる場所では、水は恵みを与えるものとあらゆるものを破戒するものとの両面をもつものとして齋祭られる。水に溺れて死ぬ、という事実を砂漠の民は理解するだろうか。井戸から勝手に水を飲んだ、その一事で殺されても仕方が無いという論理を、溺れて死ぬかもしれない民族は理解するだろうか。一杯の水に命を賭けるのが是非かを問うのは、無意味である。水のために殺しあうところもあれば、溺れるところもある、そこに生まれる水への祈りも又異なったものである。前述の竜神伝説や大蛇伝説についても、全てが同じではない。その場所場所而异なった性格を持ち違った行動を伝えてきたのは、そこに生きた人々が求めてきたものが当然異なっていた事の証なのである。

誤解を避けるために付け加えさせてもらおう、戒律の厳しい宗教は排他的であるような印象を与えるが、それは当を得ていない。彼らが行おう

としている宗教行事は、彼らにとつて必要だから行うのであつて必要の無い者に見せるために執り行つていけるのではない。祭礼の行われる場所に不必要に近づいたり結界を破つたりさえしなければ、共存は可能なのである。他人が大切にしているものは、大切なものと認めねばならないし、宗教行動が理解できないから間違いだ未開だ野蛮だと決め付けてはならない。

お正月に、若水を汲むという風習があつた。今でも行われているかもしれないが、井戸水を汲む儀式だった。年越しの注連飾りを井戸に捧げた名残だろうか、水道の蛇口に同じ飾りをしていた。それらの儀式が廃れて行つたのは、水道網の完備である。蛇口(この名前にも重要なヒントがあると思えるのだが)をひねれば水は流れ出す。当たり前、畏れ敬う必要が無くなった。だから水への祈りが、日常から消えてしまった。しかし、怖れ敬うものが消えてしまったわけではない。

ここ五十年、私たちは水を汚してしまつた。工業廃液等による汚染は、水俣病などの今まで遭遇する事の無かつた業病をもつて私たちに襲ひ掛かつた。説明された原因への対処で、

業病の発生は押さえ込まれている。しかし、汚れた水のすべてが浄化されたのではない。

汚れた水は、地下水となって地中深くに蓄えられている。雨として大地を潤した水が、泉となって地上に湧き出して来るまで二百年とも三百年ともいわれている。その湧き出した水は、汚れたままなのだろうか。水俣病の悲劇は、再現されるのだろうか。

これ以上水を汚すことが無ければ、悲劇の再現は無い。火山爆発での火砕流や溶岩流が、水を汚した時代があつた。しかし、古代人は生き続けることができた。水が浄化されたからである。浄化したのは、巨石である。

次回、水と巨石への考察を述べたい。